

オランダの改良服運動

——デン・ハーグ市立美術館コレクションより

デン・ハーグ市立美術館ファッション衣装部門キュレーター マデリーフ・ホーヘ

REFORM DRESS IN THE COLLECTION OF THE GEMEENTEMUSEUM DEN HAAG

Madelief HOHÉ, Curator, Fashion and Costume Department of the Gemmentemuseum Den Haag

The dress reform movement that originated in Great Britain in the 19th century was interconnected with vanguard art movements such as the Pre-Raphaelite movement, aestheticism, and Arts and Crafts movements. Artists were interested in producing new clothing. In step with the philosophies of the reform dress movements, the Liberty department store in London sold aesthetic dresses designed with the participation of artists. They were beautiful dresses characterized by artistic colors and embroideries. In 1902, the Amsterdam-based apparel company Metz & Co. became the exclusive agent of Liberty in the Netherlands, and Dutch women were exposed to the reform dress movements through the Liberty textiles and dresses.

The Dutch Society for the Improvement of Women's Dress (Vereeniging voor Verbetering van Vrouwenkleeding), established in 1899, consisted of intelligent women from the well-off class. The reform dress movement in the Netherland is distinguished from those in other countries in that such women designed and produced clothing by themselves. The Dutch women designed beautiful, artistic reform dresses, which were distinguished from the fashionable clothing made in Paris.

While its dresses were ridiculed as “shapeless bags,” the Society continued discussion about the designs of reform dresses. The characteristics of such Dutch reform dresses were the decorations and colors influenced by the Nieuwe Kunst (art nouveau in the Netherlands). The Dutch art nouveau movement favored geometric decorations and purple and green combinations.

In 1909, to spread excellent reform dresses, the Society established a school to train reform-dress professionals.

During the period between 1910 and 1920, the Dutch movement was influenced by the Cubism, Wiener Werkstätte and De Stijl movements, making the geometric style more apparent. Women's fashion in 1920, after the First World War, as represented by the designer Gabrielle Chanel, liberated women more than reform dresses, ending the mission of the reform dress movements.

序章

20世紀初頭のオランダでは多くの改良服運動が行われた。そこには、コルセットをはずし、より実用的で衛生的な拘束の少ない服を着ることで身体に自由を与えたいという欲望があった。この服がどのようにデザインされたかを探るのは興味深い。この問いに対してオランダでは様々な主張がなされている(註1)。そこには他国での傾向を反映したものも、オランダの改良服運動について論じたものもあった。アプローチに関しては、保守的なものも非常にラディカルなものもあった。ヨーロッパの一部の国では、アンリ・ヴァン・ド・ヴェルド(ブリュッセル)やアルフレッド・モーアブッター(ベルリン)、グズタフ・クリムト(ウィーン)のような芸術家によって女性服の新しいフォルムが提案されたと言われる(註2)。だが、オランダでは、改良服をデザインし、作ったのは女性たち自身だったのだ。ここにおいて彼女たちは、1899年設立のオランダ女性服改良協会が用意したプラットフォームフォームを利用していた(註3)。

「芸術的な」改良服は着用者の生活哲学についての態度を表明するものだったため、パリの流行を無視し、純粹に美的なものが求められた。オランダの改良服運動に関わった女性のほとんどは富裕階級で、社会と芸術についての考えを押し進めてきた。女性服改良協会のメンバーには、アレッタ・ヤコブス(オランダ発の女性医師)のような女性解放運動の旗手だけでなく、衛生的で動きやすいデザインの服の重要性を理解していたデン・ハーグやアムステルダムの名家の女性たちがいた。彼女たちの多くは社会主義的な思想を受け入れ、19世紀に現れた心霊術や神智学のような秘教的な活動にも関心を寄せており、そのなかには菜食主義者もいた(註4)。改良服運動のメンバーは改良服を新しい生活様式の一部だとみなし、より民主主義的な、よりよい世界をつくろうと奮闘した。身体を動かしやすい改良服はオランダ領東インド(現在のインドネシア)の熱帯気候で生活するオランダの女性にとって魅力的なものであり、歌手や女優にも好まれた。

本稿は20世紀初頭オランダの改良服の事例について、デン・ハーグ市立美術館のコレクションを参照しながら論じていく。2011年、同美術館では美術の文脈で20世紀初頭の衣服を取り上げた展覧会「ファッション♥アート」が開催され、このコレクションが重要な役割を果たしていた(註5)。

リバティ百貨店とアムステルダムのメッツ&コー

19世紀のイギリスでは、多くの前衛的な芸術運動が改良服運動に取り組んでいた。過去や自然にインスピレーション源を求めたラファエル前派、審美主義、アーツアンドクラフツ運動などの芸術家はみな、既存のものに代わる芸術的なデザインの衣服を作ることに関心を抱いていた(註6)。ロンドンのリバティ百貨店は、新しいドレスに使うための、良質で芸術的な色使いの布地を求める声に応えた。この百貨店は1884年以来、審美主義運動のメンバーである建築家のE・W・ゴッドウィン指揮のもと設立された「服飾部門」でいわゆるエステティック・ドレスを販売する(註7)。これらの服は改良服運動の思想に沿ってデザインされており、コルセットをつけずに着るものであった。こうした服が美しいのは芸術家とのコラボレーションのおかげであり、それらはしばしば新しいスタイル、すなわち「芸術的な」色彩や美しい刺繍を特徴としていた(註8)。1902年にアムステルダムのアパレル企業「メッツ&コー」がオランダにおけるリバティ百貨店の総代理店となり、オランダの人々はリバティ百貨店の思想を深く知ることができるようになる。メッツはリバティの布地を、1904年にはさらにロンドンから輸入したドレスも販売した(註9)。一般にメッツの顧客は、衣服によって生活についての哲学を表明する先進的な女性であった(註10)。デン・ハーグ市立美術館はリバティ製の、ハイウエストのスカート、ジャケット、スモックブラウスのセットを所蔵している。当時リバティが作っていた審美的スタイルの好例となるこの服は、ヘンリエット・ウィレルミナ・ゼーフレイン＝ウィヒャース[1869-1912]が着用していたものであった(Fig. 1)。メッツの注文帳によると、1906年から1908年のあいだに彼女が同社に何度か注文をしていたことがわかる(註11)。

新しい美を求めて

リバティ百貨店の思想は、1899年11月にオランダ女性服改良協会が創刊した『オランダ女性服改良協会月報 Maandblad der Vereeniging voor Verbetering van Vrouwenkleeding』(以下、月報)に反映されている。オランダ女性服改良協会では、改良服がとるべき形について活発な議論がなされた。自ら制作した服を着るオランダ女性——有名であれ無名であれ——の写真が、定期的に月報に掲載され、どれだけ彼女たちが古代、中世、そしてルネサンスからインスピレーションを引き出しているかを示した。この雑誌はまた、しばしばパリのオスマン通り191番地にあったマルゲーヌ＝ラクロワ店の古典的なデザインを取り上げた。マルゲーヌ＝ラクロワの改良服はデン・ハーグ市立美術館のコレクションとして収蔵されている(Fig. 2)(註12)。このトレーンを引いた非常にエレガントなハイウエストのドレスは、控えめとはいえ、改良服運動の思想をはっきりとあらわしている。

「袋のような服」、あるいは趣味のよい改良服

オランダ女性服改良協会では、改良服と流行との関係について、またどうすれば改良服をより魅力的に見せられるかについて絶えず話し合っていた。月報での議論からは、複数の種類の改良服があったことが推測される。協会の正会員の服と、実際に流通したよりおしなやかな服のあいだには大きな違いが見られる。たとえば、トレーンを引くべきか否かについての意見の衝突もあった。トレーンが不衛生だと指摘する反対意見がある一方で、パリの流行を無視することはできないとする賛成意見も出された（註13）。幅広のシルエット——身体にぴったりと沿う当時の流行からはまったく外れている——のために、改良服は「袋のような服」と揶揄され、女性が改良服を着たがらないのはその不恰好な形のせいだと月報で述べられている。月報を精査すると、オランダの改良服はニューウェ・クンスト（オランダ版アール・ヌーヴォー）の影響を受けた装飾と色彩設計による個人の創作であったことが明らかである。そこでは幾何学的な装飾と、紫と緑の組み合わせが好まれた。これはたとえばイギリスの婦人参政権論者たちのあいだでは色彩象徴と結びつけられるものである。1908年以降、女性社会政治連合のメンバーたちは紫、白、緑をそれぞれ尊厳、純潔、希望の象徴だとみなした（註14）。こうしたオランダ改良服の一般的特徴はデン・ハーグ市立美術館に収蔵されているドレスに表れている（Fig. 3）。オランダ女性服改良協会エンスヘーデ（オランダ東部の工業都市）支部の1904/1905年の会員名簿（註15）に登録されている、E・ヒュンダー・スレースウェイクが所有していたものと推測されるこれらのドレスは当時の流行の名残を見せる短いトレーンがあるものの、着やすいハイウエストの服であった。

女性服・子供服改良のための職業専門学校

1909年、優れた改良服が手に入りやすくなるように、オランダ女性服改良協会は自ら「女性服・子供服改良のための職業専門学校」を設立した。この学校の生徒は、協会の理想の服を作るプロとなるべく訓練された（註16）。デン・ハーグ市立美術館は本稿の女性校長マリー・ファデホンがデザインし、教員のバステリアナ・スホットが着ていたドレスを収蔵している（Fig. 4）（註17）。この踝丈のドレスは「ティアーバッハ法」——オランダ人女性のマリー・ティアーバッハ＝パリにちなんで名づけられた——にしたがってデザインされた（註18）。改良服サークルのあいだでは有名だったこのティアーバッハ法は、身体をゆるやかに包んだ布にピンを打ち、縦に入った髪を縫うことでゆったりとした仕立てを行う方法である。このような改良服の構成には、衣服の重さから肩を開放したいという欲望

が見られる。当時は肺が肩までであると信じられていたため、肩に過度の重さをかけることは不健康だと思われたのである。

マリー・ベイヤー＝ド・ヒラーフによるデザイン

新世紀の初め、オランダの女性は新しいシルエットだけでなく、新しいタイプの装飾も求めていた。彼女たちはアンリ・ヴァン・ド・ヴェルドやアルフレッド・モーアブッターのようなアール・ヌーヴォーの芸術家によって作られたエレガントなデザインについては知っていた。彼女たちはまたしてもニューウェ・クンストに目を向け、刺繍やろうけつ染めを使って適切な装飾を考えた。その格好の例は、1904年前後にマリー・ベイヤー＝ド・ヒラーフが自分のためにデザインしたウールのドレスである (Fig. 5)。オランダ女性服改良協会のメンバーであった彼女は、どうにか改良服の原則に従いつつもエレガントな服を作ろうとした。このドレスは、綿の裏打ちを施したボディスにウールのハイウエストのスカートが続いている。その上に羽織る薄緑のウールのボレロには、装飾的モチーフがきれいにアップリケされていた。実用上の特徴としては、前明きや、縫い目にうまく隠されたポケットがスカートに配されていることなどが挙げられる。

アイキャッチャーなバタフライ・ドレス

この時代の前衛的な刺繍の好例としては、ヘルマン・クロッペルスが1914年にデザインしたドレスに見られる蝶がある (Fig. 6)。この蝶は首周りの前後をニューウェ・クンスト様式で飾り、明るい緑、紫、薄紫が組み合わさった目を引くような華やかな色彩がモダンで芸術的な様相を呈する。ドレスは著名な女優、エルセ・ファン・ドイン [1881-1930]——本名をペギー・ニコリーヌ・モルツェルといい、クロッペルスと1914年に結婚した——のために誂えたものであった。エルセ・ファン・ドインはオランダ神智学運動の著名なメンバーであり、そのドレスのデザインは彼女の哲学的関心を反映している。この薄紫の絹の服は、蝶の刺繍と木製のビーズがあしらわれたオーバードレスとシフトドレスで構成されている。エルセ・ファン・ドインのバタフライ・ドレスはデン・ハーグの街中でも目を引き、ウィルヘルミナ女王が馬車で通り過ぎた時、振り返って彼女が歩き去るのを見つめたほどであった (註19)。

新しい思想が流行する

1910年から20年にかけて、キュビストやウィーン工房、デ・ステイルの思想を反映した幾何学様式がより顕著になり、リバティ製ドレスの流れるようなラインはすでに流行遅

れであった。「M・フォッケル女史」として知られるオランダ人女性のワードローブは、現在のデン・ハーグ市立美術館に収蔵されている。このなかには、張りのある綿やウール製の着心地の良いモダニズム的な幾何学模様のドレスもある (Fig. 7)。この頃、女子の地位は第一次世界大戦、家庭の外での仕事、スポーツへの参画などの影響を受けた。ガブリエル・“ココ”・シャネルはモダンな若い女性の象徴であった。あふれる若さと堂々とした態度をもった彼女は男性服の要素を取り入れたスポーティな女性服をデザインした。彼女はジャンパーやカーディガン、スーツやジャージーのドレスなどを流行らせたのである。1920年代に見られるこれらの要素は、オランダ人デザイナーのミース・ファン・オスの作品と共鳴している。すなわち、モダニティ、幾何学装飾、そして動きやすさである (Fig. 8)。機能性と衛生面における変化は1920年代の女性ファッションの主流となり、事実、改良服運動よりもずっと効果的に女性を解放した。それゆえオランダでは、女性服改良協会の月報は1926年に発行を停止する (註20)。時代がこの運動に追いつき、彼女たちの理想がようやく社会の主流となったのである。

〈註〉

1. 改良服運動は子供服にも関心を向けていたが、紙幅の都合上、この点についてここでは扱わない。1984年、ユトレヒトの中央美術館で「オランダの改良服」をテーマにした展覧会が開催され、そこではデン・ハーグ市立美術館の収蔵品が主たる展示品となっていた。本稿は、次の展覧会カタログのための調査に基づいたものである。Hohé Madelief, *Mode ♥ Kunst*. Exhibition catalogue. The Hague: Gemeentemuseum Den Haag, Zwolle: WBooks.
2. Meij 1982/1983, Mackrell 2005, p. 109, Sterenborg 2010.
3. この協会は1898年に国が開催した女性労働者展を受けて設立された (Schnitger 1984, p. 1)。オランダの男性芸術家にもヤン・トーロプやギユスターヴ・ファン・デル・ワル・ベルネのように改良服に関心を寄せた者がいた。トーロプはデザインしたいという意思を見せてはいたが、実際にすることはなかった。ギユスターヴ・ファン・デル・ワル・ベルネは女性服改良協会のメンバーで、職業専門学校で働きもした。彼は改良服をいくつかデザインし、このテーマについての執筆や講演も行った (Schnitger 1993, p. 86)。
4. Schnitger 1993, pp. 4-5.
5. 会期は2011年9月3日から2012年1月8日。
6. Meij 1982/1983, p. 24.
7. Meij 1982/1983, p. 24.
8. 絹は特別にリバティ百貨店のために「芸術的な」色彩で染められた。当時パリで普及していたアニリン染めとはまったく異なった色彩による微妙な陰影がつけられた。リバティの絹ヴェルヴェットにつけられた詩的な名前は自然への関心を示唆している。「紫陽花、ターコイズ、トマト、霧の青、霞の青、向日葵、闇の孔雀、クリームレモンホワイト、檉の葉、翡翠、銀梅花」など。Velveteen Liberty & Co Ltd. London, cat. no. KA 22911, collection Amsterdam Museum, Amsterdam.
9. Timmer 1995, p. 22. コンスタンス・ウィバウトのテキストが添えられたメッツのパフレット (1960年春号)。
10. Timmer 1995, p. 23.
11. Documentation on C.H. Zeverijn-Wichers, Gemeentemuseum Den Haag; Metz & Co appointments diaries. Amsterdam City Archives, no. 977, 191 (no. 628, 3-10-1906 and no. 629, 3-10-1906), 192 (no. 301, 10-12-1906),

195 (no. 169, dated 30-1-1908). 彼女の名前は「C・C／ゼーフレイン夫人」(夫のクリスティアーン・コルネリス・ゼーフレインの名)として1906年と1908年に何度も現れる。

12. Maandblad, 1 July 1901, p. 68. 女性服改良協会のメンバーたちは1901年7月の月報で彼女の「シルフィード」と呼ばれる作品について議論をしており、このときには既にマルゲーヌ＝ラクロワの作品を知っていた。そこに掲載されたイラストは1901年5月5日発行の『新流行 La Nouvelle Mode』からの転載で、コルセットなしで着る服だと推測される。

13. Schnitger 1984, p. 15.

14. www.en.wikipedia.org/suffragette.

15. Archive of the Vereeniging Vakschool voor Verbeetering van Vrouwen- en Kinderkleding, cat. O. 899, no. 122, Annual report and membership list for 1904/1905, in the Amsterdam City Archives.

16. Schnitger 1984, p. 18.

17. アムステルダム美術館はファデホンのデザインによる茶色い絹の刺繍が入った青いサテンのドレスを収蔵している。また、ユトレヒトの中央美術館は女性服改良協会の著名なメンバーであるJ・L・レデーケ＝フックが着ていた薄緑のドレスを収蔵している。このドレスは協会の職業専門学校で彼女のために作られた。

18. Schnitger 1984, p. 49, 50 and Schnitger 1993, p. 86.

19. Meij 1998, p. 53. デン・ハーグ市立美術館コレクションのエルセ・ファン・ドインの資料も参照のこと。ここにはヘルマン・クロッペルスの二番目の妻、J・E・クロッペルス＝ファン・ケンペンの情報も含まれている。

20. 『私たちの衣服』は1920年に単独刊行物としての出版をとりやめたが、しばらくのあいだは『家庭の内と外』という雑誌の一部としての発行が続いた (Schnitger 1984, p. 21.)

〈参考文献〉

Hohé Madelief, ed. 2011. *Mode ♥ Kunst*. Exhibition catalogue. The Hague: Gemeentemuseum Den Haag, Zwolle: WBooks.

Mackrell, Alice. 2005. *Art and Fashion. The Impact of Art on Fashion and Fashion on Art*, London: B T Batsford.

Meij, Ietse. 1982/1983. 'Kunstenaars envrouwenkleding omstreeks 1900.' *Kunstlicht* no. 8 winter: 24-33.

Meij, Ietse. 1998. 'Mode en reform.' *Den Haag rond 1900. Een bloeiend kunstleven*. Exhibition catalogue. The Hague: Gemeentemuseum Den Haag, Blaricum: V+K Publishing: 40-54.

Schnitger, Carin, and Inge Goldhorn. 1984. *Reformkleding in Nederlands*. Exhibition catalogue. Utrecht: Centraal Museum Utrecht.

Schnitger, Carin. 1993. 'Women's Dress Reform in the Netherlands.' *Textile History* 24 (1): 75-89.

Sterenborg, Leonie. 2010. *A la mode nouvelle. Art nouveau kunstenaars als ontwerpers*. doctoraalscriptie Culturele Studies. Univesiteit van Amsterdam. Timmer, Petra. 1995. *Mets & Co. De creatieve jaren*. Rotterdam.

〈図版〉

Fig. 1. リバティ社 ウォーキング・ドレス 1906-07年頃

Liberty & Co, Walking costume, London/ Amsterdam, ca. 1906-07, wool, Liberty silk, Gemeentemuseum Den Haag, K 161-1696 a-e. Worn by Mrs. H. W. Zeverijn-Wichers. (All photos copyright in this article : Alice de Groot, Gemeentemuseum Den Haag.)

Fig. 2 オランダの改良服(「ファッション♥アート」展より) 中央:マルゲーヌ＝ラクロワ イヴニング・ドレス 1900-10年頃

Dutch reform dresses (some by Liberty's) in the exhibition *Fashion ♥ Art*, 2011; in the middle: Margaine-Lacroix, Evening dress, Paris, ca. 1900-10, silk, metal thread, Gemeentemuseum Den Haag, K 132-1951.

Fig. 3 「ファッション♥アート」展会場風景 左:改良服 1905-10年頃 右および中央:Fig. 4、Fig. 1参照。 Exhibition *Fashion ♥ Art*, 2011, Gemeentemuseum Den Haag Left: Reform dress, ca. 1905-10, cotton, velvet, Gemeentemuseum Den Haag, K 32-1973; Dresses right and in the middle: see Figs. 4 and 1.

Fig. 4 マリー・ファデホン(デザイン)、女性服・子供服改良のための職業専門学校(製作) ドレス 1913年

Marie Faddegon (design), Vakschool voor Vrouwen- en Kinderkleding (execution), Dress, 1913, Liberty silk, glass beads, Gemeentemuseum Den Haag K 161. 1974. Worn by Bastiana Schot.

Fig. 5 マリー・ベイヤー＝ド・ヒラーフ ドレス 1903-06年頃

Marie Beijers-de Graaff, Dress, ca. 1903-06, wool, cotton, Gemeentemuseum Den Haag, K 71-1961. Worn by Marie Beijers-de Graaff.

Fig. 6 ヘルマン・クロッペルス ドレス 1914年

Herman Kloppers, Dress, 1914, cotton, silk, wood, Gemeentemuseum Den Haag, K 58 1964 ab. Worn by Else van Duyn, actress and married to Herman Kloppers.

Fig. 7 「ファッション♥アート」展より M・フォッケル女史着用のドレス 1915-19年頃

Tree dresses, in exhibition *Fashion ♥ Art*, 2011, worn by Miss M. Fokker, ca. 1915-19, Gemeentemuseum Den Haag, K 142-, 144-en 145-1969.

Fig. 8 「ファッション♥アート」展会場風景 左：ミス・フォン・オス アンサンブル 1925年頃 ドレス 1925/26年頃 右：レーン・ド・フリース＝ハンブルヒェル ドレス 1934年頃

Exhibition *Fashion ♥ Art*, 2011; Left: Mies van Os. Ensemble, ca. 1925 and Dress, ca. 1925/1926, wool, hand woven, Gemeentemuseum Den Haag, K 357-1997 and K 72-1961. Right: Leen de Vries-Hamburger. Dress, ca. 1934, wool, hand knitted, beads, sequins, K 44-1984.

マデリーフ・ホーヘ (Madelief Hohé)

ライデン大学にて美術史を専攻。メトロポリタン美術館コスチューム・インスティテュートでの研修を経て2000年よりデン・ハーグ市立美術館勤務。2003年よりファッション衣装部門のキュレーター。2005年、パリのガリエラ美術館との共催展に携わり、以後、主な展覧会として「Fashion NL: the Next Generation」(2006年)、「Hague Court Fashions」(2007年)、「The Ideal Man」(2008年)、「Haute Couture. Voici Paris!」(2010年)、「Fashion ♥ Art」(2011年)、「Fabulous Fifties – Fabulous Fashion」(2012年)などがある。現在、ドイツ、メッティンゲンの Draiflessen Collection との協働による展覧会「Chanel」を企画。メッティンゲンでは4月より7月まで、デン・ハーグでは10月より翌年2月まで開催予定。

(※肩書は掲載時のものです)